



TITLE:

<大會抄録>イスラム化に伴う暦・ 交易・巡禮儀禮の變遷:七世紀のア ラブ社會

AUTHOR(S):

醫王, 秀行

CITATION:

醫王, 秀行. <大會抄録>イスラム化に伴う暦・交易・巡禮儀禮の變遷:
七世紀のアラブ社會. 東洋史研究 2002, 61(3): 491-492

ISSUE DATE:

2002-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155434>

RIGHT:

明末清初には、文人と妓女との親密な交流が見られた。その意味では、冒襄、余懷の二人は、明末風流文人たちの繼承者たるに過ぎない。しかしながら、明清の鼎革を経ることによって、明末の女性たちは、輝かしき明の世の象徴としての意味をも負うようになった。本報告では、冒襄と余懷の交遊、『影梅庵憶語』の流通と讀者の反應などの材料をもとに、清初「東南故老遺民」にとつての「風流餘韻」の意味をさぐってみることにしたい。

クブラウィーヤの「成立」

矢 島 洋 一

タリーカを單純にスーフィー教團と捉える理解は現在修正されつつある。しかし、タリーカとは何か、具體的には、一つのタリーカの範圍はどこまでか、スーフィーがあるタリーカに歸屬するということとは如何なる意味を持つのか、何をもつて一つのタリーカの成立と見なすことができるのか、といったタリーカの存在形態を巡る基本的な問題についての共通認識は未だ確立されていない。タリーカはイスラーム世界史において重要な役割を擔ってきたと言われるが、その機能面を理解するためには形態面の理解が不可欠の前提である。

そこで本報告では、一三世紀に中央アジアのスーフィー、ナジュムッディーン・クブラーによって創設されたとされるクブラウィーヤを例に、タリーカの「成立」の意味について検討する。特

に一三・一四世紀における初期クブラウィーヤのスーフィーたちの著作や活動の分析によって、クブラウィーヤの道統、教義、人的組織、歸屬意識、他者の認識の各側面におけるクブラウィーヤの「成立」の意味を検討し、それらを總合することでタリーカの存在形態を理解するためのモデルを提示したい。

イスラム化に伴う暦・交易・巡禮儀禮の變遷

——七世紀のアラブ社會——

醫 王 秀 行

預言者ムハンマドがメッカを征服(A. H. 8)し、別離の巡禮(A. H. 10)を終えるまでのごく短い期間に、その後のイスラム社會のあり方を決定づける規定が數多く作られた。暦、巡禮儀式、そして巡禮時における交易のあり方も一變した。

暦は從來の太陰太陽暦から純粹な太陰暦へと改變され、これによってアラビア半島の巡禮システムは一變し、メッカのみが巡禮地としての機能を持つことになった。神聖月の規定も改められ、多神教徒に神聖月の禁忌は適用されなくなった。イスラム化が進行する中、部族檜の秩序を支えていた神聖月の持つ意味も歴史的に變化した。

ハッジはもともメッカへの巡禮ではなく、ヒジャーズ地域の部族集團が主催した、メッカ東方の谷間における祭禮であつた。メッカのクライシュ族はこれに参加する一部族にすぎなかったが、

イスラム化以降ハッジの儀禮にメッカでの儀式が加わった。

巡禮時の交易のあり方も變化し、ウカーズなどジャーヒリーヤ時代に榮えた市は徐々に衰退した。商賣のあり方も、ムハンマドは様々な規範を定めたが、コーラン、スンナの定める賣買規定がジャーヒリーヤ時代の慣習をまったく否定するものか斷定はできない。

イスラムはメッカに始まるが、しかし、ジャーヒリーヤ時代の社會秩序は、決してメッカ中心に動いてはいなかったのである。

オスマン帝國の改革思想再考

——「新オスマン人」を中心に——

新井政美

十九世紀にオスマン帝國の西洋化改革を先導し、方向づけたと言われるのが、「新オスマン人」と總稱される一群の知識人である。サードウク・リファト・パシャ（一八〇七—五六）が一八三七年にウィーンに公使として赴任したのち、改革派の同志ムスタファ・レシト・パシャ（一八〇〇—五八）に書き送った見解は、三十九年に公布されるギュルハーネ勅令の骨組みを、ほとんどすべて先取りしたものであったが、同時にその意見は、従来のオスマンの傳統の線上で理解可能なものでもあった。

その後登場した「新オスマン人」たちは、サードウク・リファト・パシャが紹介した西洋の近代文明をオスマン社會に導入すべ

く言論活動を行なった。しかし彼らの多くは、政府の壓迫を受けて一八六七年にヨーロッパへ逃れると、イスラムの文脈で政府批判をするようになる。そしてそうした批判の鍵になったのが「平等」概念であった。彼らは「國民」を希求する一方で、ムスリム・非ムスリム間の平等を「反イスラム的」と斷罪したのである。また彼らは、政府批判の切り札として「シャリーアの實施」をも持ち出した。一八七〇年代にイスタンブルへ歸還すると、彼らの論說からは「イスラム」を鍵とする政府批判は姿を消すが、しかし「シャリーアの實施」や「硬直したシャリーア」という言説自体は生き續け、その後の知識人たちの言論の中で、繰り返し登場することになるのである。

新羅骨品制再考

李成市

骨品制は、新羅の王京人を對象とした族制的身分制であり、聖骨・眞骨の骨階層と、六頭品・五頭品・四頭品などの頭品階層とで構成されていた。このうち聖骨は、夏德女王の死去により六四五年に消滅したと伝えられるが、後代になって夏德女王以前の歴代に對損されたという見解もある。頭品階層は六頭品から順次下降する構造からみて、元來、一頭品にいたる六階層からなっていたと推定される。

こうした骨階層と頭品階層の多階層からなる骨品制の成立につ